

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成 27 年 10 月 28 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科英語学英米文学専修

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 村上 幸太郎

助成の種類	平成 26 年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 在外研究長期助成	
研究課題名	チャールズ・ディケンズの初期作品研究	
受入機関	レスター大学(英国)	
渡航期間	平成 26 年 9 月 11 日 ~ 平成 27 年 9 月 29 日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会計報告	交付を受けた助成金額	3,000,000円
	使用した助成金額	3,000,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	査証取得費: 71,150円
		渡航費: 201,000円
その他滞在費: 2,727,850円		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)	
	あまり経済的な心配をすることなく研究に打ち込むことができ、本当に助かりました。 ありがとうございました。	

成果報告書および成果の概要は、財団に郵送(あるいは持参)するとともに、Excel・Wordファイルでメール送信して下さい。メール送信分の印鑑は不要です。

私は2014年9月から一年間、英国のレスター大学で19世紀イギリスの作家であるチャールズ・ディケンズ（Charles Dickens）の初期作品に関する研究を行った。滞在中に研究成果をまとめた論文を執筆したが、以下にその内容について報告したい。

近年ディケンズ研究においては、彼の初期の作品や伝記的事実に着目し、ディケンズがどのように作家としてのアイデンティティを確立していったかということへの関心が高まっている。そういった風潮に従い、私も博士課程に進学してからはディケンズの初期作品を研究対象としてきたが、英国に滞在中、私はディケンズの処女作品集である『ボズのスケッチ集』（*Sketches by Boz*）と、その頃に彼に影響を与えていたと思われるロマン派の散文作家たちの作品、とりわけチャールズ・ラム（Charles Lamb）の『エリア』（*Elia*）と呼ばれるエッセイ群を比較し、作家としてのキャリアの初期においてディケンズが前時代からの影響を受けつつ、自らのオリジナリティの確立を模索していたのかということを検討した。

まずは、両作品において作者のペルソナとして機能する語り手のボズとエリアの性格についての比較を行った。『ボズ』における語り手は、若いディケンズの性格を反映し、目まぐるしく変化する1830年代のロンドンの街並みを観察する喜びに満ち溢れており、この作品集は激動の時代を写實的に描くストリート・スケッチの先駆的作品だと見なされている。一方、ラムの『エリア』における語り手は年老いた老人であり、彼の好奇心を引きつけるものは過去の遺物や若いころの思い出であり、現在の通りの喧騒などには見向きもしない。この点において2つの作品の語り手は対照的な人物であると言えるが、一方で *Boz* には語り手が中年男性の仮面を被り、失われゆく過去の風景を惜しむ作品もいくつか見られる。こういった際にはボズの態度はエリアと類似しており、ノスタルジアというロマン派にとって重要なテーマが、一見新しいスタイルで書かれているように見えるディケンズのスケッチ群の中に表出していることを明らかにした。現在発行されている本からだけでなく、ラムがエッセイを連載していた『ロンドン・マガジン』（*The London Magazine*）や、ディケンズがスケッチを連載していた『モーニング・クロニクル』（*Morning Chronicle*）などから連載当時の版を大学のデータベースを通して閲覧できたため、研究をスムーズに進めることができた。

次に、ラムとディケンズが類似した内容を扱っている作品、特に煙突掃除夫についてのエッセイに関する考察を行った。18世紀末以来、煙突掃除夫の徒弟たちの過酷な労働状況は社会問題になっていたのだが、2人は他の作家とは異なり、彼らの苦境を感傷的に描くことを意図的に避けている。あくまで社会問題はほのめかす形で提示する一方で、彼らは煙突掃除夫やその徒弟たちの存在が人々を道行く人々を楽しませていたことを強調している。近代化や社会問題の是正は双方の時代において取り組まれていたが、社会改良の名のもとに街並みが画一化されていくことへの不満が彼らのエッセイには表出している。このよう

に雑多な要素を包含したロンドンの喧騒に魅力を感じるという点においても両者は類似している。この章では煙突掃除夫に対する当時の世論や劣悪な環境を糾弾した文書なども背景知識として参照したが、それらを調べる際にも大学のデータベースが役に立った。

最後に、ディケンズとラムの双方の作品にしばしば演劇に関する比喩が用いられていることに着目し、両者の演劇評に関するエッセイの比較を行った。ラムは19世紀の演劇が人々の日常に根差し、かつ道徳的な教訓が含まれたものになってしまったことを嘆いている。一方、『ボズ』の中でディケンズが言及する演劇はラムが批判しているメロドラマが中心であり、それは道徳的なメッセージ性を伴うものであるのだが、ディケンズが着目しているのは劇の内容そのものではなく、演劇に魅了される人々の姿であり、日常からのしばしの逃避をほほえましく描いている。つまり、両者は描いている演劇のジャンルこそ違えど、演劇の持つ非日常性を楽しんでいるという点において共通しているのである。こういった2人の演劇観が、煙突掃除夫や乞食のような、社会の画一化によって消えつつあった、通りの外見に異質な要素をもたらす事物を賛美させているのではないかと指摘し、ラムの体現するロマン派の考え方や芸術観はディケンズに受け継がれていると結論づけた。

今回の研究においては、ディケンズの専門家であるホリー・ファーノウ (Holly Furneaux) 上級講師、ラムの専門家であるフェリシティ・ジェイムズ (Felicity James) 上級講師の双方の丁寧な指導のもと、有益な助言を受けながら研究を進めることができた。また、レスター大学にある豊富な19世紀の資料やデータベースを利用することもできたので、より広い視野から分析を行うこともできた。また、19世紀ヴィクトリア朝の歴史に関するセミナーにも参加したので、ヴィクトリア朝当時の政治的・文化的背景に関する知識も深まったように思う。さらに、イギリス滞在中に国際学会にも参加し、著名な研究者の講演を聞き、また彼らとの親交を通じて新たな研究の方向性も見えてきた。このように私は非常に有意義な一年を過ごすことができたのだが、資金援助がなければ長期滞在は到底不可能であったと思う。海外での研究という私の夢を実現させてくれた貴財団に、心から御礼申し上げます。